応徴士（軍属）

松浦利満（湊町・65歳）

昭和十四年春四国鳴門海峡近くの村より、東京市芝白金三光町の昆布問屋に丁稚奉公に来て三年、昭和十七年一月十日、いつもの通り拭き掃除店の前を掃除し、二階の店員部屋の布団を上げていると「満どん一寸下に来い」と店主が呼ぶので、店主の前に行くと「とうとう来たぞ」と言って書類を渡された。それを見て驚いた。軍需大臣岸信介の名で軍属として徴用するので何日迄に飯田橋の小学校まで出頭せよ、とのこと、命令に従わねば憲兵隊に引渡すとのこと。いずれは兵隊か徴用とは思っていたが現実になると驚いた、大東亜戦争が始って約一ケ月少々第一次徴用が十六年で私は第二次徴用令である。指定された日に飯田橋の小学校に行くと、同年令の者が約四百名位集合している。身体検査、面接と順番に手ぎわよく、進行している。いよいよ私の面接である。係官にうやうやしく礼をす、「まあ掛け給え」とのやわらかい言葉、「実は君は南方の飛行場建設に行ってくれんか」とのこと、十六歳で南方え連れて行かれては大変と思ひ、思ひ切って「暑い所は苦手です。他はありませんか」と言うと「そうかいやか、困ったな、東京の軍需工場なら行ってくれるか」「大戦争をしているので仕方ありません」と言うと「よし」と言って合格印を押され「近日中に工場を指定するのでそれ迄身辺の整理をしておく様に本日は御苦労でした」重い足を引ずり店迄帰って来て、主人に報告「仕方がねえや戦争しているからな」と主人も半ばあきらめている様子、当時は家事使用人（女中）及び店員は新しく雇用してはならない、との法律があった為、商店は人材不足で困っていました。町工場の工員は雇用してもよかったが、商店は法律で禁止されていた。徳島県鳴門市の両親に報告と別れの為急ぎ帰省すぐ東京迄引返し荷物をまとめ、当時十七年は衣類が切符制になっていたので衣料切符を大半使ひ国防色の国民服を東京五反田駅前の衣料品店で買求める四十円也であった。当時私の給料が五円、大変な出費である。店員十名に見送られ指定された工場に出発、東京急行下丸子駅で下車すると、工場の係官が大勢出迎えに来ていた。係官に連行され工場に到着。海軍省指定株式会社北辰電機製作所（現横河電機）で各種計器メーカーで現在でも世界的に有名なメーカーである工場横隣にある北辰電機富士航空計器青年学校に行く長々しい校名だが社長が富士航空計器の社長も兼ねているし工場が隣なので学校は合同であった。全員三百六十五名整列し、業務の訓示、校長、教頭のこれからの指導方針等の説明があり、三ケ月間は軍事教練、実習、機械工学を学ぶそうだ衣服ゲートル帽子等の配給がある我々は軍属待遇なので軍隊の服を支給されたが大きくブカブカである衣服は適当に体に合せとのこと。友人に取替えてもらったりしてどうにか身体に合はす。校長は予備役海軍中将谷口政美閣下。元水雷戦隊司令官として活やくした

水雷戦の名将だったそうだ。夕食を早めに工場の食堂でとり寄宿舎に行く、洋々寮といって千名位が住んでいる。現在の池上本門寺の近くである。一部屋に四名が住む、朝早く起床し、掃除、点呼、朝礼をし工場の食堂で食事を終えると学校に行き夕方定時間迄勉強と教練でしぼられる。特に工業数学はむずかしい三角関数とか、ピタゴラス定理と説明されても小学校卒業の我々にはむずかし過ぎ頭が痛くなるばかり先生は工場の係長クラスで早稲田大学理工科出身者である。学科の時間は面白くないが教練の時間は教官はきびしいが工場の裏の多摩川原での教練は勉強よりも楽しい。青々と茂る草花、清い空気、遠くに雪をいただいた富士山が見える。勉強など忘れて小銃肩に走り回って居ればよい、ただし食料不足の折、腹が空くのには困ったが、小休止の時は草の上に寝そべって青い空を見ていると空気はうまいし、どこで大戦争をしているのかと思う程。のどかで平和だとつくづく思う。でも腹が空くのにはほとほと参った。朝は金属の茶腕に軽く一杯の盛切飯に味噌汁のみ、昼食夕食はいわしの目刺五、六尾か野菜の煮物位、現在なればカロリー不足とか言って若者は文句を言うだろうがそんな事を言えば半殺しになる位ブンなぐられる。若かったので元気なのか、張り切っていたのか栄養失調にもならず至って元気であった。いつの間にかこんな歌か仲間達が唱ひ出した「可哀想だよ徴用さん。金属の茶腕に竹の箸佛様でもあるまいに。一膳飯とは情けない」と上手に作詞するものだ本当だから仕方がない。食堂に人よりも早く行きテーブルの上に置いてある大茶缶を取って人よりも多く早くのむことである飯が少いのでお茶で腹を満すのである。「茶腹も一時」との諺がある。昔の人はよい事を言ったものだ水をガブのみすると下痢する恐れがあるがお茶は熱湯だから心配なしだ「茶腹は安全」なのだ。食べる事には特に色々な方法を考えた。食堂の連中と仲よくする事だ、食堂の連中に好かれるのと嫌われるのと、大分サービスが違ってくるので色々考へたがあまりよい効果にありつけなかった。きびしかった教練実習、学科と毎日が夢の様に過ぎ愈々現場配属である。日給九十九銭を支給し第2製造部第三工作課機械旋盤B組を命ずの辞令が下る。月約三十円弱、五円の月給から三十円大企業は沢山月給をくれるものだと感心し嬉しかった。勉強はからけし駄目だが商人の店に居たのですぐソロバンをはじく旋盤B組の組長に連行され工場に行く。旋盤、フライス盤、平削盤、ターレット盤、歯切盤、あらゆる機械が数百台ゴウゴウたる音を立て乍ら太い鉄材を切削し色々な部品を作っている。モーターのウナリ油のにおいで頭がボーとする。よくこんな所で一日中立ったまま仕事が出来るものだと感心し、こんな事が我々に出来るだろうかと不安になる。一ケ月は現場見習をする。先輩のやっている機械の前で見学し乍ら不明の点は聞いたり、実際にやらせてもらったりし乍ら腕を磨く。その道に入ると中々むずかしく本や実習とは大部ちがってむずかしい。組長より図面と材料を受取ると、すぐ「これはこうして段取すると」すぐ、頭にピーンと来ないと作業は出来ない。即ち応用がきかないと旋盤工は出来ない。一ケ月後、我々が使用する旋盤が続々据付けられている。毎日多忙と立っている事がつらかった。見習期間も終り各自一台の旋盤が割当てられ愈々自力で作業をしなければならない。毎日色んな部品を作るがどんな物が出来るのか、組立係の連中しかわからない。聞く処によれば潜水艦のジャイロコンパス。軍艦に必ず取付けてある測深儀（軍艦より電波を海底に発射。そのハネ返りで海の深さを測定する装置らしい事位しか機械屋にはわからない。作業にも段々となれてどうにか一人前位近くなり、立っているのにもなれ毎日油にまみれても別段汚いとも思わなくなる。図面通り一ミリの

百分の一の誤差もなく仕上がるとうれしいものである。暑かった夏も終り稲の取り入れも終りを告げる頃晴天でうららかな日である午後の作業に夢中で取り組んでいると、急にサイレンが鳴る。スピーカーが「空襲警報各自機械の下に退避せよ」とマイクが終らぬ内にドドン、バババン、大音響、高射砲の発射音である蒼白になり急ぎ機械下に逃げ込む。爆音と高射砲。高射機関銃の射撃音で耳がボーとなる。機械下から他を見ると全員蒼白でふるえている。始めてのことだから無理もない。これが日本人が始めて味わったドリトル中佐の率いるB25爆撃機の東京初空襲である。近くには三菱重工、三井精機、東京計器、新潟鉄工、白洋舎等の大工場地なのでねらわれたらしい。三十分位で空襲解除になったが、耳がジーンとしてあまり作業もはかどらなかった。以後東京は三日に一度はBさんの爆撃にあった。富士山を目標に右に入ると東京に必ずお目見えする。又は房総半島目標に来るのは群馬、埼玉の方に行く、これは飛行機を作っている工場があったからである。仕事にもなれ、Bさんの来訪にもなれ、多忙な毎日を送る昭和十九年である愈々徴兵検査である。十九年は一才年下の大正十四年生れの者も繰上げ我々と一緒に検査である。兵隊も戦傷者がふえたのと、日本軍は段々玉砕全滅がふえ兵隊が不足して来たらしい。現在の東京タワーのある芝公園で検査を受ける第一乙種合格である。第一乙種は甲種合格者と同格で入隊が義務付けられていた。徴用軍属でも兵隊でもどちらでもよいと思っていた。東京にいても空襲でいつ死ぬかわからない。どうにでもなれと独身者は至ってのんきなもの、食べる物に不自由がなければどこでも何でもよいわい位しか思っていなかった。そんな頃第三製造部勤務を命ずとの辞令がくる。第三製造部は東京急行洗足駅下車静かな住宅地にボカンと油臭い工場がある。ここは社長が町工場を経営していた頃の工場で、社長はここで色々な計器を考案し現在の大企業にしたそうだ。いわゆる北辰電機発祥の地である。新兵器を作るらしい。現在も盛んに使われているレーダー、空襲に来たB29を撃ち落した機体から取りはずした爆撃照準器を作る仕事である私は照準器を作る部門に配属される。航空計器は精密で僅かの誤差も許されない。試作した結果テストは上々で量産に入る。現在でもそうだが日本人は外国のものをマネてより以上のものを作る。我々の時もそうであった。しかし悲しいかな量産しても装置を取付ける飛行機が皆無に等しかったのである。日本の爆撃機は九十九パーセント双発機で四発の大型機は数える程しかなかった。深山という大型機はあったがほんの僅か四発の下駄を付けた水上機（海面に着水。フロートで浮く）はあったが、スピードが遅く戦斗には不向で人員輸送などに使用出来るのみで、我々がいくら作っても積む航空機がないのだ。それでも我々は夜勤をしてまで作り続けた。命令なので仕方がない所詮B29の大型機の装置を双発機に積めるはずはない。夜間の作業中も電燈を暗くし窓には暗幕を張り灯りの漏れない様にして懸命に作り続けた。新聞では戦争は日本に不利の様だ。勝った勝ったと言っているが玉砕撤退全滅の記事を見ると我々も何とも不安である。でも負けるなど夢にも思った事がない。昭和二十年も明ける愈々食料不足である。朝食を食べ工場に帰る途中、食堂の女従業員が空地に生えている「アカザ」という草の葉を摘んでいる。どうするのかと思って不思議に思っていた。種を明かせばこれが何と夕食のオヒタシに出るのである。何もしらない我々は毎日黙々と食べていたのである。知らずに食べていると割合おいしいものだ。以後我々は「アカザ」に向って立小便することは止めた。自分達が食べるからである。今年はどうしても軍隊に入隊しなければならない。どちらでもよいが軍隊の方が食べ物は豊かにあるだろうか

ら気持は早く入隊日が来ればよいと思っていた。その矢先三月B29三百機東京大空襲である。お出でなすったわい。と丁度私は当夜は夜勤で作業中で夜半眠いなーと思ひつつ仕事をしていたのである。空襲警報のサイレンが鳴ると作業が中止になるので自分の工場に爆弾が落ちなければ作業休止で楽出来る位しか思っていなかった。ところが丁度パチンコ玉を何万ケを板の上に落した様な音がする。今迄のカンでこれはやられたと思った。ものすごいザーザーという音、（焼夷弾が落下する音）工場には変電所が必ずある。大きな変圧機が林立している。その変圧機に大型焼夷弾が命中したのだ（大型焼夷弾はドラム缶と同じ大きさ）変圧機には油が入っているので即大火災である。工場長が水をかけろ、風上に行けと（風下だと煙で目がつぶれる）ドナる。バケツで水をかけるが体が熱く近寄れない。全員退避せよ。風上に逃げ火災を見守る。我が工場がくずれ落るのを見ると涙が出る。全部灰となるを見るとガックリする。夜が白々と明けると見渡す限の焼野原、洗足から国鉄目黒駅まで一夜で焼野原と化してしまった。東京急行の線路がひん曲り枕木がメラメラと火を吹いている。若い母親が子供をオンブしたまま死んでいる。顔立ちの美しい娘さんがリュックサックを背おって真黒焦になって死んでいる。楽しい事も、恋愛、女の幸せを知らず息を引取ったかと思うと、男でも涙が出てくる。戦争は兵隊のみでなく善良な武器を持たない市民迄も巻添えにする惨たんたるものである。十七年一月から二十年迄一生懸命国の為と思って悪い頭を振しぼって勉強し製作したものが一夜の内に灰と化し全焼した。工場の門の前でうずくまっていると、何も知らない日勤の者が続々出勤してくる。一夜の内に灰と化した工場を見て唯目を白黒させている。「お前生きていたか、よかったな」これが友達の言葉である。何はともあれ腹が空いているが食べる物がない。仕方なく食堂のあった場所に行くと樽が焼け、味噌のみがブツブツくすぶっている隣に人参もくすぶっている仕方がない背に腹はかえられん焼人参に焼味噌つけて朝食にする、明日から焼あと整理、東北の一ノ関工場に転勤が決り材料機械を国鉄大崎駅に積込中大崎駅で終戦放送を聞く、戦争は非戦斗員がみじめである。